

【 復活のトロパリ 第8調 】



めぐみふかきしゅよ、なんちはたかきより
恵深主 爾 高
くだり、みっかのほうむりをうけて、
降 三日 葬 受
われらをくるしみよりときたまえり、
我 等 苦 釋 給
わがいのちとふくかつなるしゅよ、こう
我 生 命 復 活 主 光
えいはなんちにきす。
榮 爾 歸

【 日本の亜使徒聖ニコライのトロパリ 第4調 】



しととひとしくどうざなるもの、ちゅう
使徒等 同座 者 忠
じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい
實 神 智 役 者 聖
なるしんにえられたるふえ、ハリストのあい
神 撰 笛 愛
にみちたるうつわ、わがくにのこう
満 器 我 國 光
しよ うしゃ、あしとしゅきょうせいニコライ
照 者 亜使徒主教聖
よ、なんちのぼくぐんのため、および
爾 羊 群 爲 お及



【 日本の亜使徒聖ニコライのコンダク 第4調 】



た り 、 い ま こ の き ょ う か い の た め に い の り
今 此 教 會 の た め に 祈

た ま え 、 け だ し わ れ ら そ の し ょ し は な ん
給 蓋 我 等 其 諸 子 爾

ぢ に よ ぶ 、 わ が よ き ぼ く し ゃ よ 、 よ ろ こ
呼 我 善 牧 者 慶

べ よ 。

【 復活のコンダク 第8調 】

い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
今 何 時 世 世

だ い じ ん じ な る し ゅ よ 、 な ん ぢ は は か よ り ふ く
大 仁 慈 主 爾 墓 復

か つ し て 、 し せ し も の を お こ し 、
活 死 者 お 興

ア ダ ム を ふ く か つ せ し め た ま え り 。 エ ヴ ア は
復 活 給

な ん ぢ の ふ く か つ を た の し み 、 せ か い の は 極
爾 復 活 樂 世 界

て は な ん ぢ が し よ り お き た る を い わ う 。
爾 死 興 祝

司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有

ひと なんぢ ぞう しょう よ つく なんぢ もろもろ たまもの もつ これ かざ
 となし、人を 爾 の像と 肖 とに依りて造り、爾 が 諸 の 賜 を以て之を飾
 り、願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行 う者を棄てずして、其 救 の爲に
 つうかい た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ
 痛 悔を立て、我等卑しくして不當なる 爾 の諸 僕を、此の時に於ても、 爾 が
 せい さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た
 聖なる祭壇の光榮の前に立ちて、爾 に當然の伏 拜 讃 榮を 奉 るに堪うる
 もの しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ
 者となしし主 宰よ、爾 親 ら我等罪 人の口よりも聖 三の歌を受け、 爾 の
 じんじ もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい
 仁慈を以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が 靈
 からだ せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい
 と 體 とを聖にし、我等に 生 涯 善 功を以て 爾 に務むるを得せしめ給え、聖
 なる 生 神 女と古世より 爾 の 喜 を爲しし諸 聖 人との祈禱に依りてなり、)

司祭) けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ
 蓋 我が神よ、 爾 は聖なり、我等光榮を 爾 父と子と聖 神に献ず、今も何時も世世

に、



【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る
 聖 神 聖 勇 毅 聖
 じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め
 常 生 者 我 等 憐
 よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い
 聖 神 聖 勇 毅 聖
 な る じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ
 常 生 者 我 等 憐
 め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、
 聖 神 聖 勇 毅



せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 の 者 の よ 、 我 等 を 憐

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん
光 榮 は 父 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。
歸 今 何 時 世 世 に 、 ア ミ ン 。

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 の 者 の よ 、 我 等 を 憐

れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
聖 神 聖 勇

き 、 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を
毅 聖 常 生 の 者 の よ 、 我 等 を

あ わ れ め よ 。
憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

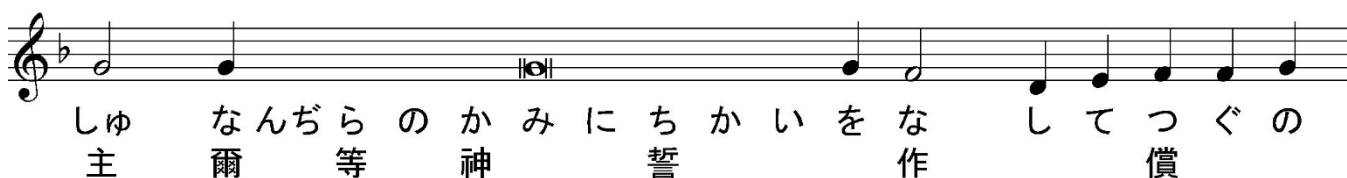
【 プロキメン 提綱 主日第8調 】

司祭) つし 慎みて聽くべし、衆人に平安、

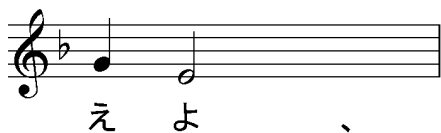
誦經) なんぢ しん 爾の神にも、

司祭) えいち 睿智、

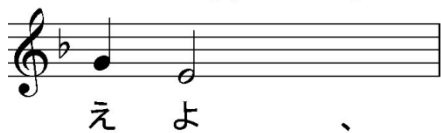
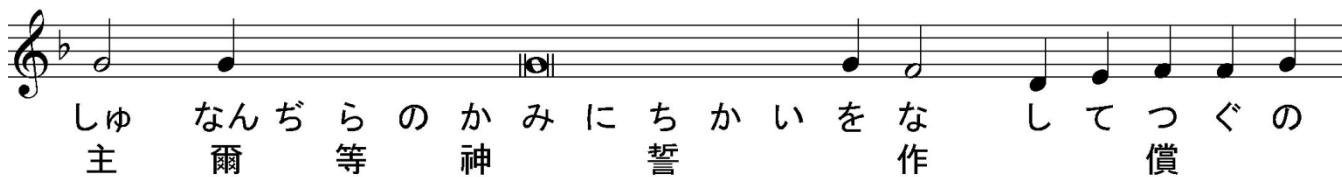
誦經) プロキメン、主 爾等の神に 誓を作して 償えよ、



し ゅ な ん ぢ ら の か み に ち か い を な し て つ ぐ の
主 爾 等 の 神 誓 作 償



誦經) ^{かみ}神は^しイウデヤに^{そのな}知られ、^{おおい}其名はイズライリに 大なり、



誦經) ^{しゅなんぢら}主 爾 等の^{かみ}神に



【 アポストロス 使徒 經 182 半端 コリント後書 6 章 16～7 章 1 節 】

司祭) ^{えいち}睿智、

誦經) ^{せいしと}聖使徒^{じん たつ}パウエルが^{こうしょ}コリント人^{よみ}に達する後書の讀、

司祭) ^{つつし}謹みて^き聽くべし、

誦經) ^{けいてい}兄弟よ、^{なんぢら}爾等^いは^{かみ}活ける神の^{かみ}殿なり、^{かつ}神の^い嘗て^{ごと}言いしが^{いわ}如し、^{われかれら}曰く、^{うち}我^お彼等^にの中に居

^{かれら}り、^{うち}彼等^ゆの中に^{われかれら}行かん、^{かみ}我^{かれらわれ}彼等^{たみ}の神となり、^{しゅまたいわ}彼等^{ゆえ}我の^{なんぢ}民とならん。主又曰く、故に 爾

^ら等は^{かれら}彼等^{うち}の中より^い出でて、^{みづか}自^{はな}ら^{けがれ}離れよ、^ふ汚穢^{なか}に^{しか}觸る^{われなんぢら}る勿れ、^い然らば^{われ}我^に爾等^をを納れん、我

^{なんぢら}爾等^{ちち}の父となり、^{なんぢらわれ}爾等^{しぢよ}我の子^{しゅぜんのうしやこれ}女とならん、主^い全能者^こ之を^{ゆえ}言う。是^{しあい}の故^{もの}に至愛^をの者よ、

^{われらすで}我等^か既に^{ごと}此^きくの^え如き^{おのれ}許^{およそ}約^{にく}を得^{しん}たれば、^{けがれ}己^{いさぎよ}を^{かみ}凡^をの^を肉^をと^を神^をとの^を汚^をより^を潔^をくし、^を神^をを

^{おそ}畏^{もつ}る^{せい}を^なを^を以^をて^を聖^をを^を成^をす^をべし。

(比較用 口語訳) わたしたちは、生ける神の宮である。神がこう仰せになっている、「わたしは彼らの間に住み、かつ出入りをするであろう。そして、わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となるであろう」。だから、「彼らの間から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。そして、汚れたものに触てはならない。触なければ、わたしはあなたがたを受けいれよう。そしてわたしは、あなたがたの父となり、あなたがたは、わたしのむすこ、むすめとなるであろう。全能の主が、こう言われる」。愛する

者たちよ。わたしたちは、このような約束を与えられているのだから、肉と霊とのいっさいの汚れから自分をきよめ、神をおそれて全く清くなろうではないか。

【 アリルイヤ 主日第8調 】

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾 に平安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾 の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) アリルイヤ、



誦經) ^{きた しゅ うた かみわ すくい かため よ} 来りて主に歌い、神我が救の防固に呼ばん、



誦經) ^{さんよう もつ そのかんばせ まえ すす うた もつ かれ よ} 讃揚を以て其顔の前に進み、歌を以て彼に呼ばん、



司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん} 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念

^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ} 畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ
 を思い且つ 行 いて、屬 神の生活 を過ぐるを致させ給え、 蓋 ハリストス神よ、
 なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん
 爾 は我が 靈 と 體 との 光 照 なり、我等 爾 と 爾 の無原の父と至聖至善にし
 いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ
 て生命を 施 す 爾 の神とに光 榮を獻ず、今も何時も世に、アミン。)

【 エヴァンゲリオン 福音經 ルカ福音書 17 端 5 章 1～11 節 】

司祭) えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん
 睿智、 肅 みて立て聖 福音經を聴くべし、 衆 人に平安、



司祭) でん せいふくいんけい よみ
 ルカ傳の聖 福音經の讀、



司祭) つつし き か と き みづうみ はま た ふたつ ふね みづうみ
 謹 みて聴くべし、彼の時 イイス、ゲンニサレトの 湖 の濱に立ちて、二 の舟の 湖

にあ み ぎよしゃ ふね はな あみ あら かれ ぞく ひとつ ふね のぼ
 に在るを見たり、漁 者は舟を離れて網を洗えり。彼はシモンに屬する 一 の舟に登りて、
 すこ きし はな こ ざ ふね たみ おし かた おわ い
 少し 岸より 離れんことを請い、坐して舟より民を教えたり。語り 竟りて、シモンに謂え
 ふか ところ うつ あみ おろ すなどり こた い ふうし われよすがら
 り、深き 處に移り、網を下して、 漁 せよ。シモン對えて曰えり、夫子よ、我 終 夜
 ろう う ところ しか なんぢ ことば よ われあみ おろ すで これ おこな
 勞して、得る 所 なかりき、然れども 爾 の言 に依りて、我 網を下さん。既に之を 行
 うお かこ はなはだおお あみさ いた すなわちた ふね あ とも まね きた
 いて、魚を圍めること 甚 多く、網裂くるに至れり。乃 他の舟に在る侶を招きて、來
 たす かれらきた うおふたつ ふね み ほとん しづ
 り助けしむるに、彼等來りて、魚 二 の舟に刳ちて、 幾 ぞ沈まんとせり。シモン ペトル
 これ み ひざもと ふ い しゅ われ はな われざいにん けだし
 之を見て、イイスの膝 下に伏して曰えり、主よ、我を離れよ、我 罪 人なればなり。 蓋
 かれおよ かれ とも あ もの みなすなど うお ため はなはだおどろ とも
 彼 及び彼と偕に在りし者は、皆 漁 りたる魚の爲に 甚 驚 けり、シモンの侶たりしぜ
 こ およ またしか い おそ なか いま
 ヴェデイの子イアコフ及びイオアンも亦 然り。イイス シモンに謂えり、懼るる 勿れ、今よ
 のちなんぢひと すなど かれらふね きし ひ いつさい す かれ したが
 り後 爾 人を 漁 らん。彼等舟を岸に曳き、一 切を捨てて、彼に 従 えり。

(比較用 口語訳) イエスはゲネサレ湖畔に立っておられたが、そこに二そうの小舟が寄せてあるのを
 ごらんになった。漁師たちは、舟からおりて網を洗っていた。その一そうはシモンの舟であったが、
 イエスはそれに乗り込み、シモンに頼んで岸から少しこぎ出させ、そしてすわって、舟の中から群
 衆にお教えになった。話がすむと、シモンに「沖へこぎ出し、網をおろして漁をしてみなさい」と
 言われた。シモンは答えて言った、「先生、わたしたちは夜通し働きましたが、何も取れませんでした。
 しかし、お言葉ですから、網をおろしてみましよう」。そしてそのとおりにしたところ、おびた
 だしい魚の群れがはいって、網が破れそうになった。そこで、もう一そうの舟にいた仲間に、加勢
 に来るよう合図をしたので、彼らがきて魚を両方の舟いっぱいに入れた。そのために、舟が沈みそ
 うになった。これを見てシモン・ペテロは、イエスのひざもとにひれ伏して言った、「主よ、わたし
 から離れてください。わたしは罪深い者です」。彼も一緒にいた者たちもみな、取れた魚がおびた
 だしいのに驚いたからである。シモンの仲間であったゼベダイの子ヤコブとヨハネも、同様であった。
 すると、イエスがシモンに言われた、「恐れることはない。今からあなたは人間をとる漁師になるの
 だ」。そこで彼らは舟を陸に引き上げ、いっさいを捨ててイエスに従った。



※ 聖体礼儀③ (金ロイオアン) 〜